

特別展「オタケ・インパクト」

—越堂・竹坡・国観、尾竹三兄弟の日本画アナキズム—

泉屋博古館東京（六本木） 24.10.09～12.15

「尾竹越堂」「竹坡（つくは）」「国観（こっかん）」の三兄弟は、明治から昭和時代にかけて、さまざまな展覧会で活躍をした日本画家であるが、「竹坡」を筆頭にラディカルな表現を試み、時として奇抜な生き方を貫くなど、従来の日本近代美術史からはこぼれ落ちてきた存在であったとされている。

三兄弟は、「横山大観」などの東京美術学校を卒業した「学校派」に対して新潟から上京をして展覧会を舞台に画名を高めて、とりわけ「竹披」は、展覧会ごとに作風を変えて人気を集めていった画家である。

尾竹国観 《油断》 1909年 六曲（3.6m x 1.8m）2枚 一双の屏風絵



国展に出品された壮観で賑やかな作品で、二枚屏風の右半分の下級武士が働く絵柄からは、陣太鼓、ときの声、甲冑のぶつかる音が響いてきそうだ。



左半分の図は、うめき、あせり、どなり声があふれかえ、戦死と向き合う人々は、陣幕の外にあって、悶絶・絶叫・苦悶の声を想像させる。



尾竹竹披 《月の潤い・太陽の熱・星の冷え》 1920年

明治時代末から大正時代にかけての「尾竹三兄弟」は、日本美術との確執や文展の落選などを背景に、門下生を集めて画塾展を軸に活動をした。この時期には、日本にもたらされた未来派に着想した

抽象的な作品など「新たな画風」を展開している。また、画題も歴史故実に基づくテーマから、「労働や抽象的テーマ」へと移行している。